学習院大学史料館における教育普及活動(一)

―社会が学習院大学史料館に求めるもの―

長佐古　美奈子

一　はじめに

学習院大学史料館は学習院大学の附置研究施設として、活発な研究活動に努めている。この紀要紙上でも研究部門の成果を発表してきたが、博物館相当施設としての活動、換言すれば教育普及部門の活動については彙報欄への掲出に留まり、その成果についての考察がなされたことはなかった。

そこで、今号と次号の二回に渡り、当館における教育普及活動について、成果報告並びに考察をおこなう。一回目は「社会が学習院大学史料館に求めるもの」について史料館学芸員長佐古美奈子が、二回目は「高等科総合学習の実践を通じて（仮題）」について学習院高等科教諭會田康範が論述する。

二　学習院大学史料館における教育普及活動の状況

（一）平成一六年度（二〇〇四）以前の学習院大学史料館の状況

学習院大学史料館（以下、史料館と略す）は学校法人学習院の百年記念事業の一環として、「文書記録・遺物等の史料を蒐集保管並びに、その調査・研究を行うとともに、それらの史料を展示して教職員・学生及び一般の利用に供することを目的」[1]として昭和五〇年（一九七五）二月に開館した。

史料館の設立を遡ると、昭和三九年（一九六四）に文学部史学科の管理のもとに史料室が設置されたことに始まる。その後、同四八年に当時学長であった児玉幸多先生を中心として、史料室の将来構想の検討が開始され、児玉学長執筆の設立趣意書が各学部教授会で審議され、同五〇年二月六日の大学協議会での承認の後、二月二六日に史料館は大学附置機関[2]として発足した。

児玉学長執筆の設立趣意書[3]には史料館の設置目的が記されている。以下、その全文を掲げる。

研究教育の目的のために必要とする資史料を収蔵し、また展示開陳する場の必要なことはいうまでもなく、大学によっては一定範囲の研究分野を対象として独自の史料館または博物館を設置しているところが少なくない。早大における演劇博物館、明大における刑事博物館のごときもその例であり、また昭和女子大学における国文学文献の蒐集のごときもよく知られた例といえよう。

学習院大学においては遺憾ながら他に誇るべきものを持たず、わずかに史料室に若干の近世農村関係および藩

政関係史料を収めているにすぎない。しかし、このわずかな史料にも、江戸の建材および薪炭材の関東最大の補給地であった武州秩父郡名栗村文書（この文書はまた近世末期における百姓一揆の代表的な秩父騒動に関する基本的史料でもある）、また近世初期の新田開発史上もっとも整備された史料である信州佐久郡五郎兵衛新田史料など学界に誇るべきものを含んでいる。また藩政関係のもの（陸奥国棚倉阿部家文書）は、整理の結果、四十九年度には文部省の科研費（刊行助成費）の補助を得て目下印刷中である。

これら既収のものは、所蔵者の好意によって無償で寄贈を受けたか寄託されたものである。

学習院出身者中には、旧大名・旧公家、または維新後の外交官・政治家・学者等も多く、また実業界に活躍した人たちも少なくない。それらの人々のうちには、適当な施設があれば、寄贈または寄託をしたい希望の者も多くあるが、現在の施設では設備・収容能力ともにこれ以上の収集は不可能である。今後において、本学の特色を出すため、積極的かつ系統的な蒐集が望まれるが、そのためには施設の充実を先にする必要がある。

今までの状況では、それらの貴重文献がみすみす他の施設に収められるのを傍観しているほかはない。たとえば、本学に当然来るはずのものでも、宮崎県延岡の旧藩主内藤家文書が明治大学に入り、真田・津軽・蜂須賀等の大名家文書が国立史料館に収められている有様である。

しかし、本学においてもこれらの受け入れ態勢を整備することによって、なお多くの資史料の入手はそれほど困難ではない。そして今がその好時期と思われるので、百年記念事業の一環として、史料室の拡充による史料館の設置を望むものである。

この児玉先生の思いのもとに、史料館は設立された。

一方、昭和五六年一月に、学習院大学に学芸員資格取得のための科目が設置され、翌年には資格取得の最終段階

である博物館実習が行われた。博物館実習は博物館法施行規則によって、博物館または博物館相当施設で実習することにより単位修得が定められているため、この年度の実習生は学外の博物館等で実習を行った。しかし、学習院大学「学芸員資格取得に関する委員会」では、今後履修学生の増加に伴い、実習依頼機関の開拓は困難であるとして、史料館を博物館相当施設とし、博物館実習生の受け入れを行うことを要請した。

要請は昭和五七年四月九日の史料館運営委員会で審議承認され、史料館を博物館相当施設として申請する方針が決定された。同六〇年一月に史料館は東京都より博物館相当施設の指定をうけ、六二年度より学習院大学の博物館実習生の受け入れを始めた。

以降史料館は博物館としての諸事業を実施すると共に研究体制を整備して、その内容の充実に努めた。平成九年度（一九九七）からは史料館内に学芸員資格取得事務室を設置し、関係事務も兼務している。(4)

ところでこの博物館としての諸事業とは何をさすのか。博物館の規定法である「博物館法」には「博物館の事業」として以下の条文が掲げられている。（傍線部筆者）

第三条　博物館は、前条第一項に規定する目的を達成するため、おおむね次に掲げる事業を行う。

1．実物、標本、模写、模型、文献、図表、写真、フィルム、レコード等の博物館資料を豊富に収集し、保管し、及び展示すること。

2．分館を設置し、又は博物館資料を当該博物館外で展示すること。

3．一般公衆に対して、博物館資料の利用に関し必要な説明、助言、指導等を行い、又は研究室、実験室、工作室、図書室等を設置してこれを利用させること。

4．博物館資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと。

5. 博物館資料の保管及び展示等に関する技術的研究を行うこと。
6. 博物館資料に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書等を作成し、及び頒布すること。
7. 博物館資料に関する講演会、講習会、映写会、研究会等を主催し、及びその開催を援助すること。
8. 当該博物館の所在地又はその周辺にある文化財保護法（昭和25年法律第214号）の適用を受ける文化財について、解説書又は目録を作成する等一般公衆の当該文化財の利用の便を図ること。
9. 社会教育における学習の機会を利用して行つた学習の成果を活用して行う教育活動その他の活動の機会を提供し、及びその提供を奨励すること。
10. 他の博物館、博物館と同一の目的を有する国の施設等と緊密に連絡し、協力し、刊行物及び情報の交換、博物館資料の相互貸借等を行うこと。
11. 学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を援助すること。

二　博物館は、その事業を行うに当つては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない。

「博物館法」にいう博物館の諸事業とは、つまり、「資料の収集」「資料の整理保管」「資料の調査研究」及びその成果の「公開、教育普及活動」である。これは、先に示した史料館の設置目的と同内容である。史料館はその設置時より博物館の機能を将来的に果たすべきことを意図していたと理解される。

史料館の設立以来三〇余年を経過し、収集史料点数は一三万点を超えた。(5) 史料整理は時間を要する作業であるが、確実に進めている。「調査・研究」は大学の附置研究施設という性格上、一定水準を満たした成果を出していかなければならない。成果達成についてはいままでの紀要、目録等の刊行物を見ていただければお分かりいただけるであろう。

そこで今回の論題である「公開、教育普及活動」の部門について、史料館のこれまでの歩みと現在の試みを解析していく。

博物館法で「公開、教育普及活動」として規定しているものを抜粋するならば

博物館資料を豊富に収集し、保管し、及び①展示

博物館資料に関する②講演会、講習会、映写会、研究会等を主催

教育活動その他の活動の機会を提供し

諸施設と協力し、その活動を援助

③学校教育を援助し得るようにも留意

となろう。このうち①「展示」に関しては、史料館では毎年常設展と特別展の計二回の展覧会を開催している。

②「講演会」については、平成元年度より平成一六年度まで四五回を数える「史料館講座」を開催してきた。

このような「公開、教育普及活動」をおこなってきていたが、活動を受容する側は、概ね大学生以上が対象であり（一般入館者と比すれば、学生入館者もわずかな割合しか占めない）、入館者の多くをしめる学外からの一般入館者、学校卒業生等もその年齢層はかなり高い。

学校法人学習院では同じ法人内に幼稚園、初等科、中等科、高等科、女子中等科、女子高等科、女子大学があるにも関わらず、[6] 大学生より若い世代に対する活動③は、ほとんどなされていない。[7] また一般来館者もリピーター率が高く、新たな入館者層を開拓しなければならない状況であった。

（二）大学のおかれた立場

一方、近年の「少子化」、「入学志願者減少」という大学にとって存亡の危機にかかわる大きな課題を前に、各大学では「開かれた大学」「資格取得」を二大戦略ワードとして、その課題を「大学博物館」で解決しようとする動きが進められている。

元来、大学にある博物館・資料館などの施設は学内の学生・教員の研究に役立てる目的で設立され、学外開放に対しては消極的な施設が多かった。[8] このため平成八年（一九九六）第一四期文部省学術審議会学術資料部会は『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について』と題する中間報告を提出し、多くの大学の博物館・資料館などの施設の閉鎖的な体質を批判し、「このミュージアムを機能させることは、社会が要請する『開かれた大学』への具体的で有効な対応策である」[9]と提言した。これが大学博物館戦略を進める大きな要因となる。[10]

この動きの中で、史料館でも「平成一五年度・一六年度新規重点施策（戦略枠事業）[11]」において、「大学博物館の現状と展望―社会が「学習院大学史料館」に求めるもの―」と題し、史料館に対する外部評価をおこなった。いま、史料館が求められているものは何かについての再確認である。

その結果、史料館の将来計画として「史料館を学習院大学博物館として運営し、大学のみならず学校法人学習院の運営にも貢献していくことを将来的なビジョンとして」、短期的方針四項、長期的方針三項が提言された。[12]

以下、その報告書の内容を一部抜粋して掲げる。

Ⅰ　当面の方針～史料館から総合研究資料館へ～

1、学内での地位の確立

大学博物館として運営を行うための大前提として、現史料館の大学内での地位を確立することがある。史料館は展示会や講座の開催によって、社会教育という面では一定の役割を果たしてきたが、学内での史料館の認

知度や要請は、高いものとは言いがたい。伝統と文化を総合的に蓄積した史料館としての位置を学内で確立し、さらなる活用を願いたい。

2、教育機関としての機能を確立

学内での地位を確立する際の、最重要課題は、卒業生を含め、学生への教育機関としての役割を果たすことにある。学生への教育機関として、単に学芸員資格取得講座への協力を行うだけでなく、全学生に対し、教養を深める施設活動を行うことが必要である。

学生が大学時代に必ずこの施設を訪れ、自分の大学を様々な角度から見つめる機会を提供する、これが学生の母校への誇りを養い、彼らが大学卒業後も自らのアイデンティティをここにおくことに繋がるのである。

学生が自らのアイデンティティをおくことが可能な大学は、現代の日本社会ではそう多くなく、結果的に大学全体の高い評価につながり、学生の質の向上をもたらすであろう。

（3項略）

4、史料館から総合研究資料館へ

（前略）当面の方針として、史料館の役割機能の拡大を進めていくことにし、この史料館が大学博物館へ移行するための素地を形成する機関を総合研究資料館と位置付ける。

総合研究資料館では、より広い分野を網羅する史資料の収集、安全確実な保存・整理体制、所蔵資史料の情報提供のためのデータベース化、公開・展示の充実、著しく変化する現代社会に対応した総合的な研究の推進、教育の提供などを行うこととする。

Ⅱ　長期的な方針～総合研究資料館から大学博物館へ～

1、多彩で高度な学問の研究・発信機関

まず、総合的に集められた一次資料を利用して、さまざまな研究が学内、院内、さらには大学外部も含め、横断的に行われるような機関を目指すことを方針として掲げる。

これは各方面に相次いで大学博物館が設立される中で、確固たる地位を築くためには特徴的ある研究内容とその発信が不可欠であると考えるからである。教育機関として一三〇年近くの歴史を持ち、多彩な学部と教授陣を備えているという学習院大学の特徴を生かして、それぞれの分野ごと、また分野を超えて融合した研究の推進が望ましい。

さらに、この結果を展示・公開などにより、社会に発信することで、学習院大学の提供する質の高い教育を内外にアピールすることも視野に入れる。

（2項略）

3、学習院を社会に開く：学習院大学博物館

大学博物館は、その性格から社会に開かれた大学の顔としての役割を担っている。学習院大学博物館は学習院大学ひいては学校法人学習院を社会に開くための装置であり、その認識に基づいた活動を展開していくことを方針の最後に掲げる。

特に、明確な社会との接点となる一次資料、およびそれらの研究に関する情報提供や、公開・展示、社会人に対する教育などについての一層の充実を図り、「社会に開かれた大学」づくりに努めたい。

さらに、学習院がその教育目標である「『ひろい視野、たくましい創造力、ゆたかな感受性』を持つ優れた

人材の育成」機関としていかにふさわしいかを広く内外にアピールする広告塔として貢献することを強く望む。

これらの提言に基づき、史料館では活動のあり方を再検討した。展覧会や講座の開催によって一定の役割を果たしてきたとはいえ、大学・法人そして社会への貢献をより強めなければならないと認識したからである。

前述の通り、大学の施設の多くは学内閉鎖的なところが多い、と指摘されており「一次資料に関する学術情報の発信・受信基地としてこのミュージアムを機能させることは、社会が要請する『開かれた大学』への具体的で有効な対応策である」[13]、との提言もなされていることを鑑みれば、史料館は、高等教育機関である大学の博物館として、一般の博物館とは異なる特性を生かした独自の教育普及活動を考えることができるのではないか。加えて史料館には長年にわたり積み上げてきた業務実績、それを育んできた人的環境が豊富にある。それらを最大限に生かし、研究施設としても博物館としても魅力ある活動をしていくことが可能であり、またそれを戦略的におこなっていくべきではないか。そういった観点のもと平成一七年度からは、「大学の研究施設でもあり、一般の博物館でもある、学習院の特性を活かす史料館」として以下の活動をおこなった。

三　教育普及活動の展開―提言「社会が学習院大学史料館に求めるもの」を受けて

（一）「学習院大学をより特徴付ける史料館」としての展覧会、講座の開催

学習院はその淵源を弘化四年（一八四七）京都御所内におかれた、公家のための学問所「学習院」にもち、明治一〇年（一八七七）の学校創立も華族会館によるものであった[14]。第二次世界大戦後、一般の私立学校として再出発し、

リベラルな教育をおこなっているが、内部にいる我々と社会との間には「学習院」というイメージに対し、認識の差があるようである。

これは史料館講座・展覧会の入館者人数の比較によって初めて気づかされた点である。「表1　平成一六年度（二〇〇四）以前　入館者数トップ一〇の講座一覧」は、平成一六年度（二〇〇四）以前、入館者が多かった史料館講座の上位一〇回分を示している。その結果をみれば、皇族・宮中にかかわるもの（三笠宮殿下講演、皇太子殿下講演、歌会、大礼、朝廷）や作家、美術系のもの（美術館、絵画史料、鎧）が上位をしめる。[15]

表1　平成一六年度（二〇〇四）以前　入館者数トップ一〇の講座一覧

年月日	講演者	講演タイトル	入館者数
二〇〇四年三月九日	三笠宮崇仁親王・寛仁親王・中近東文化センター　大村幸弘	「古代アナトリア文明について」「日本とトルコについて」「今、なぜ日本がトルコで発掘調査を行うのか」	四五〇
二〇〇四年一一月二七日	辻　佐保子	辻邦生展記念講演	三六五
一九九五年七月六日	作家　辻　邦生	歴史小説と歴史資料―『西行花伝』を中心として―	三三六
二〇〇二年一一月九日	宮中歌会始披講会会長　坊城俊周	歌会・歌会始・和歌の披講	三〇九
一九九四年一〇月二七日	学習院大学史料館客員研究員 皇太子徳仁親王	オックスフォードにおける私の研究と研究施設について	二三四
一九九七年七月一〇日	宮内庁書陵部　鈴木真弓	大礼にみる装束と衣紋	二三四
一九九八年五月二九日	学習院大学文学部教授　高埜利彦	近世の朝廷儀式と公家の生活	二二二
一九九四年五月九日	東京大学史料編纂所教授　黒田日出男	絵画史料の読み方	一九六
二〇〇四年五月一一日	東京国立博物館主任研究員　池田宏	日本の鎧と兜	一九六
二〇〇三年五月一七日	学習院大学文学部教授　堀越孝一	戦後一貧書生の冒険―書物の狩	一九五

展覧会の入館者数上位についても同様の傾向が見て取れる。

表2　平成一六年度（二〇〇四）以前　入館者数トップ一〇の展覧会一覧

年月日	展覧会名	入館者数
一九八五年五月二〇―六月一九日	江戸時代の公家文書―内膳司濱島家文書―	一六八九
一九八六年一一月一七日―一二月一九日	絵巻と絵図	一四〇六
二〇〇二年六月七日―七月二〇日	西田幾多郎と学習院	一三七七
一九八二年四月八日―四月一五日	所蔵史料紹介	一〇四七
一九九八年五月二〇日―六月一九日	朝廷儀式と公家の生活	一〇一九

この結果から、学生も含め、社会が学習院・学習院大学、史料館に求めるものは、「宮中、朝廷、美術など」であることが見えてきた。学習院大学が広く様々な分野の研究をおこなっており、それ自体は高い評価を得ているが、社会には「学習院といえば皇室、華族（ここではわかりやすく＝雅（みやび）、とよぶことにする）」というような意識があることは確かで、「雅なものを一般に公開する場所」として、学習院大学史料館が求められているのではないだろうか。すなわち他の博物館や大学では得ることのできない情報、満足感を求めているのではないか。

そこで、平成一七年度からは「学習院大学をより特徴付ける史料館」として、「皇族、華族＝雅」の研究とその成果を発表する展覧会を開催した。(16)

表3　平成一七年度（二〇〇五）以降の展覧会一覧

	年月日	展覧会名	入館者数
第25回特別展	二〇〇五年一〇月二〇日―一一月一〇日	明治・大正の学び舎	一二九〇
第26回特別展	二〇〇六年七月三日―八月五日	大好き　絵すごろく展	一五一六
第27回特別展	二〇〇七年四月七日―六月九日	新収資料　高松宮家展	一九七九

第28回特別展	二〇〇八年四月七日―六月七日	明治を創った人々From男爵物語	一七三五
学習院大学公開講座展示	二〇〇八年一二月一〇日	一夜限りの源氏ものがたり	一〇三七

表3に示した通りその結果、すべての展覧会で一〇〇〇名を超える入館者を得ることができた。五回の展覧会の平均入館者数は一五一一名であり、平成一六年度以前の展覧会平均入館者数六五六名の三倍近くの記録となった。

史料館講座についても、講座内容の見直しを図った。年に三回おこなう講座のうち二回については、展覧会と連動させ[17]、また「動き」のあるもの、つまり演者のいるもの、映画上映などを取り入れ、他所開催の講座との差別化を出すことを意図した。

表4　平成一七年度（二〇〇五）以降の史料館講座（特別二回を含む）一覧

年月日	講演者	講演タイトル	入館者数
二〇〇五年六月一日	東京都現代美術館学芸員　森千花	美術館の愉しみ―日本とイギリスの美術館を旅する	三〇七
二〇〇五年一〇月二六日	東京理科大学工学部建築学科補手　杉山経子	目白・学習院のキャンパスに見る近代建築の魅力	一九六
二〇〇六年三月一日	福井大学教育地域科学部助教授　岡田裕成	南米アンデスのキリスト教聖堂装飾―エキゾティシズムの転倒―	一〇六
二〇〇六年七月二八日	東京都江戸東京博物館学芸員　岩城紀子	大正期の附録双六―川端龍子を中心に―	一〇一
二〇〇六年一〇月一一日	宮内庁書陵部編修課長　岩壁義光	写された明治天皇の地方巡幸	二四二
二〇〇六年一二月五日	笙奏者　宮田まゆみ	雅楽の愉しみ	三五四
二〇〇七年五月一一日	元中央公論社常務取締役編集局長　笠松巌	『高松宮日記』について	一七三
二〇〇七年七月九日	能楽師・金春流宗家　金春安明	能の舞に隠された意味―謡本から見た中世の音韻	四四五
二〇〇七年一一月一五日	京都造形大学教授　田口章子	歌舞伎の世界―伝統と創造―	二二五
二〇〇八年一月一三日	ウルトラセブン監督　満田　稔	さよならピラミッド校舎ウルトラセブン上映＆トークショー	二〇〇〇

二〇〇八年五月二四日	大阪教育大学准教授　二井仁美	教育福祉に賭した〝一粒の麦〟石井筆子・映画「筆子・その愛―天使のピアノ」上映	三九〇
二〇〇八年七月二六日	博物館明治村館長　飯田喜四郎	近代建築とその変遷	二〇四
二〇〇八年九月一三日	皇太子徳仁親王・満田稔・小城崇史	さよならピラミッド校舎―「記念講演」・「ウルトラセブン上映」・「ピラミッド校舎解体定点撮影」	四一〇
二〇〇八年一二月一〇日	いちひめ雅楽会・フェリス女学院大学教授　三田村雅子・学習院大学教授　佐野みどり	雅楽公演―管弦と舞楽・「源氏物語千年紀　記念シンポジウム」	一三〇〇

表4の通り、いずれの講座についても一〇〇名以上の入館者があり、平均入館者数は四六一名となった。平成一六年度以前の四五回の平均入館者数一五三名の実に三倍強を記録したのである。

他大学、他博物館との差別化、特化、学習院大学をより特徴付けることが達成できた成果であろう。

（二）アイデンティティをおくことが可能な大学への試み

戦略枠提言の第二項を実践する上では、学習院大学の学生として、学習院の歴史を知ることが、アイデンティティを確立するための道筋となるのではないか、と考えた。自らの所属校の歴史を知ることで、それが「好き」「嫌い」のどちらに繋がるにして、その歴史認識が自己確立の一歩となる。歴史は変えることができないものであり、また歴史があることは大きな付加価値である。他大学が歴史や伝統という言葉を散りばめて学生確保に動く中、学習院大学はその歴史をアピールすることにあまりにも消極的だったのではないか。その観点から、以下の試みをおこなった。

「目白キャンパスの一〇〇年」展の開催・平成二〇年（二〇〇八）は、学習院が目白にキャンパスを移してちょうど一〇〇年目であった。しかし、学生はもちろん、教職員でもその事実を知る人は少なかった。

学習院目白キャンパスには一〇〇年前に建築された建物、その後関東大震災の後に宮内省によって建てられた校舎など、その時代、時代をあらわす建物が残っている。学生達には現在使用している校舎の歴史を知ることで、学習院の歴史を学び、また親しみを感じてもらうことができるのではないか、と考え、平成二〇年度常設展「目白キャンパスの一〇〇年」展を開催した。

会場アンケートでは、在校生からの意見として

・学習院の歴史の長さをあらためて実感できました。西二号館や本部棟など伝統的なデザインが取り入れられた建築が見直されているのは大変よろこばしい。新校舎の完成が待ちきれません。

・毎日通っている校舎の昔について、知ることができて楽しかった。

などの評価があった。もちろん「地味すぎる」「もう少し広いスペースの所でやっても良いと思った」「あまり開催が認知されていない気がする」などの意見も寄せられ、今後の課題となった。

勅額の公開：「学習院」の勅額は嘉永二年（一八四九）に孝明天皇より公家の学問所に下賜されたものである。命名の典拠は「論語」の「学びて時に之を習う、亦説ばしからずや」にある。「学習院」の文字は時の右大臣近衛忠熙の筆によるもので、その後、学習院が教育機関として設立された明治一〇年（一八七七）に明治天皇より改めて本院に下賜された。以後一三〇余年「学習院の宝」として大切に保管され続け、関東大震災、戦災の際にも守られ続けてきた。現在は保存の安全性を考え、史料館が保管している。

この勅額を「目白キャンパスの一〇〇年」展に合わせて、七月二六日、九月一三日に公開した。両日とも講座開催日でもあり、それぞれ一六二名、二二八名の入館者があった。勅額のレプリカは学習院創立一〇〇周年記念会館の三階に常時展示されているのであるが、「本物の持つ迫力に圧倒された」との感想を多く聞くことができた。アンケー

トにもその結果はあらわれており、

・孝明天皇から下賜された「学習院」の勅額を拝見することができ、感激致しました（在学生）

・学習院はやっぱり日本にオンリー・ワンの特別な（Unique & Distinctive）学校だと再認識しました（本学教職員）

・孝明天皇勅額近衛右大臣染筆の「学習院」の御文字は墨痕の鮮やかさ、穏健さに感銘を受けました（一般）

と評価を受けた。

「キャンパスまるごとミュージアムツアー」の実施・学習院目白キャンパス内には一〇〇年の歴史を物語る校舎群、それを遡る江戸時代からの石碑など、数多くの史跡がある。その史跡をまわる「キャンパスまるごとミュージアムツアー」を随時実施した。

このツアーの発端は平成一七年度特別展である。その年、史料館展示室のある北二号館が工事であったため、展示室を使用できず、北別館内で「明治・大正の学び舎」展を開催することとなった。[18] しかし、築一〇〇年近くとなる木造建築校舎内では史料を陳列できないこと、あまりにも手狭であること、などから、キャンパス内にある史跡をミュージアムピースとし、目白キャンパス全体をミュージアムと見立てて、ガイド付きで巡る「キャンパスまるごとミュージアムツアー」を展覧会期間中実施したところ、大変好評であった。そこでその後は博物館実習の一環として、[19] また各学科や外部一般からの申し込みがあった時は随時、[20] このツアーを実施している。

このツアーに参加した博物館実習学生からの感想をいくつか掲げる。

・「学習院大学に入学してから今まで四年間近く、毎日のように通っていましたが、「ミュージアム」としてじっくり見たことがなかったので、大変新鮮で感激しました」

・「学習院生の一体何人がこのようなもの（注 ツアーで説明した箇所）に気づいて卒業することができるのでしょうか？知らないで卒業してしまうのは、本当にもったいないと思います。新入生のオリエンテーションでキャンパスツアーがあったらいいのにと思ってしまいました」

・「モノに価値付けをしていくことが学芸員の仕事、との考え、思いを、学習院全体をミュージアムとしてキャンパスまるごとミュージアムツアーを通して訴えていることに感動しました。普段何気なく歩き、そして勉強等で利用している大学のキャンパスが、今日のツアーでどこにも負けない、そして自慢できるミュージアムになりました」

これはほんの一例であり、ツアーを実施した学生の全員（ほぼ、ではなく全員である）が同じような感想を寄せている。

「目白キャンパスの一〇〇年」展、勅額の公開、キャンパスまるごとミュージアムツアーの実施の試みは学生の学習院大学、学習院へのアイデンティティの確立に大きく役立ったことが証明された。また後述する国登録有形文化財（建造物）登録も、今後はアイデンティティの確立に多いに貢献するであろう。

（三）「学習院ならではの研究機関」として

戦略枠提言にある学習院大学史料館として「特徴ある研究」とは何か。史料館が創立して三〇余年、その間様々な研究をおこなってきた。その中で基幹としておこなってきたことは「学習院」に関わる史料の受け入れと研究である。「学習院に関わる史料」とは、学習院自体の史料、学習院卒業生の史料、学習院教職員の史料などであるが、学習院は前述したように旧制時代は華族子女のための教育機関であったことから、卒業生の家の史料と言えば旧華族家の

史料となることも多い。児玉先生の史料館設立の趣意書にもこのことは明記されている。

史料館では阿部家、西園寺家をはじめとして旧華族家の史料を収蔵し、また特別研究では『旧華族家史料所在調査報告書』[21]の刊行などをおこなってきた。このような研究成果の公表により、「旧華族家史料についての情報は学習院大学史料館に集約されている」と評価されつつある。これは社会がもとめるもの「学習院といえば皇室、華族（＝雅）」と内部の研究成果との一致であった。

その結果、外部機関より旧華族にかかわる研究委託がなされるようになった。

平成一六年度より社団法人昭和会館よりの委託研究にて、「男爵家の成立と足跡の研究」をおこない、その成果を『昭和会館八〇周年記念　男爵物語』として刊行した。[22]男爵家は旧華族家一〇一家中五〇〇家を数えるが、今まで男爵家について系統的な研究はなされてこなかった。この研究において男爵家の成立の意義、叙爵の理由、その足跡などを詳らかにすることができた。また外部よりの委託研究を受けることは、学内予算以外の研究費を得ることでもあり、この委託研究では総額一〇〇〇万円をはるかに超える予算を研究費として使用することができた。

また、学習院が収蔵する幅広い史料を広く一般に公開することを目的として、『写真集　明治の記憶―学習院大学所蔵写真』[23]『写真集　近代皇族の記憶―山階宮家三代』[24]を株式会社吉川弘文館より刊行した。学習院内には古い写真が数多く収蔵されているが、内容的に学習院ならでは、と社会が考えるものを、まず刊行することとした。一般書店より刊行発売することにより、貴重な史料を広く公開することができるだけでなく、印刷費、広報費など内部の予算では到底まかなえない部分を書店に担ってもらうことができ、結果的には大幅な予算削減にもつながった。

(四)「学内史料レスキュー隊」の実践

戦略枠提言にある、より広い分野を網羅する史資料の収集、安全確実な保存・整理体制については、提言以前から「学習院に関わる史料」収集の一環として、学内各部署への史料収集活動の積極的呼びかけをおこなっている。

各部署で不要なものがあれば声をかけてもらい、歴史的史料的に評価できるものは収集し保存する。学習院は長い歴史を持ち、その時々の学術史料を豊富に有すると思われるが、[25]その全望はもちろん概要も把握できていない。そこで各部署に、学術史料（当該部署にとってはただのゴミと認識されている場合が多い）を廃棄する際には、是非史料館に一声かけてほしい、と呼びかけをおこなった。

その結果、理学部木越邦彦名誉教授がC14の年代測定に使用し、その後理学部棟の外側に放置されていた「縄文杉（屋久杉）」を運び出し、今後取り扱いしやすいように切断加工し、保存した。縄文杉は世界遺産に登録されている屋久島のもので、樹齢は四〇〇〇年ともいわれ、現在は島より持ち出すことは出来ない。現在となっては大変貴重な学術史料である。[26]また理学部、高等科において廃棄処分となった理科教材をサンプル的に保存することに協力した。[27]

図書館の古い書架なども廃棄処分になっていたものを保存した。これは後の調査で学習院大学西一号館、昭和寮などを設計した宮内省内匠寮技師権藤要吉[28]設計にかかると思われるものと判明した。

また後述する前川國男設計の中央教室（ピラミッド校舎）の解体にあたっては、その建築部材の一部を保存活用することを目的とし、運び出し、現在、史料館にて保存している。

各部署において保存できるものはその場で保存する方が望ましい。しかし各部署で保存しようにも「カビ、害虫」などの対処に困り、どうしてよいかわからない、との相談ももちかけられた。そういった場合は現地に赴き、カビを

払い、薄葉紙で養生し、中性紙の保存箱や封筒、文化財用防虫剤を提供し、さらに修復が必要な場合には修復専門業者の紹介もおこなった。学習院女子部よりの相談に応じ、美術品専用運搬業者を紹介したこともあった。

そのような活動を続けるうちに学内各部署だけでなく、同窓会組織（桜友会）より部活動記録の保存や、個人の史料についての相談も持ちかけられるようになった。この三月にも卒業生委員会より卒業アルバムに使用した写真の保存について学生から「廃棄するのは簡単であるが、貴重な史料となると思うので、是非史料館で保存してほしい」との要望があり、史料館にて保存することとなった。

（五）「学習院を社会に開くための装置＝窓」として

「学習院といえば皇室、華族（＝雅）」という図式に基づいた活動を主に述べてきたが、それ以外にも学習院を社会に開くための窓として、史料館でしかできない活動の模索もおこなった。

そのひとつは「さよならピラミッド校舎イベント」である。ピラミッド校舎は昭和三五年（一九六〇）に建築家前川國男による学習院大学キャンパスプランの中心的建物「中央教室」として建築されたものであるが、老朽化と新キャンパスプランによる新棟建設計画により解体されることが決定した。

解体決定後、平成二〇年一月一三日に学校法人学習院による「中央教室見学会」がおこなわれるとの情報を得た。五〇年近くにわたり大学のシンボルであり、学習院大学学生には思い出多い場所であることから、史料館としても何か心に残るイベントをと考え、「さよならピラミッド校舎イベント　ウルトラセブン第二九話「ひとりぼっちの地球人」上映＆トークショー」をおこなった。卒業生の円谷一氏が円谷プロダクションに関係しており、同話のロケ地としてピラミッド校舎が使用されていたことは、「キャンパスまるごとミュージアムツアー」中でも説明していたが、

実際の映像を上映する機会は今までなかった。

円谷プロダクションより当時のフィルムの提供を受け、同話の監督満田稔氏のトークショーもおこなわれることとなった。[29] 当日は二〇〇〇人を越える入館者があり、卒業生にとっても在学生にとっても、一般の方にとっても、感慨深いイベントとなった。

なぜ、史料館がそのようなイベントを企画するのか、といった声も聞かれたが、では、学内のどの部署がこれを企画し実行しえたか。まさに「学習院を社会に開くための窓として」の活動ではないか。ピラミッド校舎に関しては、その後、解体の様子を連続写真として記録し、長く人々の記憶に留めるべく、学習院キャンパス写真集『ピラミッド校舎の記憶』[30] の刊行もおこなった。

ピラミッド校舎イベントではじまった平成二〇年は源氏物語千年紀の年でもあった。前年度に神田龍身館長より何か関係のイベントをおこなってはどうかとの話があり、源氏物語千年紀記念シンポジウムと記念展示の企画に入った。同企画については本号特集　学習院大学公開講座「源氏物語千年紀記念シンポジウム」の記録に詳しいので、そちらを参照いただきたい。

「さよならピラミッド校舎イベント」「源氏物語千年紀記念シンポジウム・記念展示」は一日のイベントで一〇〇〇人、二〇〇〇人を集客するという、大変大きな成果をあげた。

前述した通り今年度は学習院目白キャンパス内の歴史的建造物七棟について「国登録有形文化財建造物申請」をおこなった。学習院が目白にキャンパスを移して一〇〇年、この間に建築された校舎が現用されている。学生たちにその文化財としての価値を認識してもらい、学習院大学生としてのアイデンティティの確立に貢献し、外部の方にも歴史あるキャンパスを楽しんでいただく。さらに長く校舎を残し、その価値を広く内外に認識してもらわなければなら

ない。このために、文化財登録制度の活用に踏み切った。[31]

この他にも雑司が谷地域文化創造館におけるパネル展示、学習院公開講座への協力ならびに同日のパネル展の開催、[32]学習院生涯学習センターとの連携による展覧会ギャラリートークの特別実施、チュラロンコン大学・ワシントン大学・アジアパシフィック経済史国際会議など、大学、法人への来客や学会開催時に臨時展示をおこなうなど、各部署の要請を受け、「学習院を社会に開くための窓」としての活動をおこなっている。[33]

四　おわりに

平成一七年度からの諸活動を展開し、史料館としてたどり着いた結論は、教育普及活動は狭義の教育、普及のみではない。生涯学習機関であり、社会教育機関である「博物館」においては、「すべての活動が教育普及に通じる」ということである。

さらに大学の附置研究施設としては、その大学を特徴付ける研究をおこなって、成果を発表していくことが、教育普及にも通じる。研究活動あっての教育普及なのである。博物館として一定の評価を得ているところは、教育普及活動として子供向けのワークショップなどをおこなうことが多いが、史料館に課せられているのは、まず「学習院大学をより特徴付ける史料館」として、つまり、史料館を特徴ある機関として学内外に広く認識してもらうことである。

そのためには史料館が、「学習院」を特徴付ける「もの」を持ち、特徴付ける「研究活動」をしなければならない。学習院内の歴史と伝統と文化の保存、利用、教育、普及、広報機関として、学習院にしかできないことを史料館はおこなっていかなければならないのである。

展覧会、講座の分析でも述べたが、社会は学習院に雅を求めている。それはまさに学習院を特徴づける研究テーマの一つに他ならない。もちろんそれは偏った歴史認識を持つということではない。学習院の歴史を科学的に研究し、評価分析していくことは当然である。そういった学習院ならではの歴史研究をおこなっていけるのは学習院大学史料館しかないのではないか。

また学習院を選択して入学した学生（幼稚園から大学院生、生涯学習センター受講生まで）には、史料館が率先して、「学習院」を広報、教育普及していかなければならない。もちろん入学以前の受験生に対してオープンキャンパス等の際に活動していくことも必要であろう。

「キャンパスまるごとミュージアムツアー」などは学生アンケートの指摘どおり、大学入学生はもちろんのこと、最終的には全学校の新入生へのオリエンテーション時におこなうべきであろう。それにより学習院生としてのアイデンティティの確立に確実につながる。あたりまえのことであるが、地域に開かれた史料館であると同時に、学内に開かれた史料館でなければならないのである。

しかしこれは学習院内の学校間のカリキュラム編成の問題もあり、一般に対応するよりはるかに難しい課題でもあった。幸い高等科との協力・連携により、平成一七年度より学習院男子高等科の総合学習「博物館を知ろう」講座を高大連携授業の一つとしておこなうことができた。このことは院内を縦断する大きな試みであり、史料館の学内にむけての「教育普及活動」としても、もちろん大きな試みであった。

次号ではこの活動について會田康範氏が論述する。

注

(1) 学習院大学史料館規程。

(2) 現在は大学附置研究施設である。

(3) 学習院大学五十年史編纂委員会『学習院大学五十年史』(平成一三年(二〇〇一)一〇月三一日 学習院大学)。

(4) さらに一八年度よりは学習院女子大学の実習生の受け入れも行っている。

(5) 未整理のものがあるため、正確な件数点数は提示不可能である。

(6) 敷地は違う学校もある。各学校は「付属校」ではなく、学校法人学習院のもとに各々独立している。

(7) 注(4)にあるように、平成一八年度より女子大学の実習生の受入れはおこなっている。

(8) 守重信郎「大学博物館における教育普及活動の研究—展示と展示解説—」(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.5、二〇〇四年)。

(9) 学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について(報告)』(一九九六年)。

(10) 「大学博物館」の設置には、学術標本の保存と活用の充実をはかることも大きな目的であった(岡田茂弘「ユニバーシティ・ミュージアムの必要性と構想」『東京家政学院生活文化博物館年報』第三・四合併号 一九九六年)。

(11) 新規重点施策(戦略枠事業)とは、平成一三年(二〇〇一)に、学習院大学の追及すべき価値として挙げた「教育の高度化」「研究の高度化」及びこれらの基盤整備となる「情報化」「国際化」を中心に、短期的に確実に成果が見えるもの、学習院大学の進む方向を外部に明確に示せるものについて、各部署が実施計画提出し、採択された際には一〜二年間、大規模な予算なもとに展開できる事業である。

(12) 「大学博物館の現状と展望—社会が「学習院大学史料館」に求めるもの—」(株式会社丹青研究所 二〇〇四年三月三一日)。

(13) 注(9)に同じ。

(14) 華族子女のための教育機関として華族会館により設立されたが、明治一七年(一八八四)に宮内省立となる。

(15) 一方、集客が伸びなかったもののテーマは「文書史料」「史料保存」などであった。これらのテーマの講座は講座開催をはじめた初期に多い。これは単純に「史料

館講座」の認知度が低かったためとも考えられる。

(16) 大学附置研究施設としてのレベルを下げることのないように、研究面にも配慮をした。

(17) 以前もできるだけ連動をはかっていた。

(18) 史料館は事務室、閲覧室、実習室などのある北別館(明治四二年(一九〇九)築、旧制学習院図書館)と収蔵庫、展示室のある北二号館(昭和五四年(一九七九)築RC造)に分かれている。

(19) 博物館実習の授業時には「エコミュージアム」との関連、学芸員としての心構えなどを講義した後にキャンパスツアーに出かける。

(20) 平成一九年度二〇年度の「キャンパスまるごとミュージアムツアー」の実施については三〇七頁平成一九・二〇年度の活動の記録に詳しい。

(21) 一九九三年発行。

(22) 二〇〇七年発行。

(23) 二〇〇六年発行。

(24) 二〇〇八年発行。

(25) 拙稿「旧制学習院歴史地理標本室移管資料について」(『学習院大学史料館紀要』第九号 一九九七年)。

(26) 活用については懸案中である。

(27) 高等科理科史料の活用については次号において論述予定である。

(28) その他旧朝香宮邸(現東京都庭園美術館)旧李王邸(現グランドプリンスホテル赤坂旧館)なども設計している。

(29) 満田稔監督、円谷プロダクション製作、一九六八年上映会に関しては(株)円谷プロダクションの多大なご協力を得た。

(30) 二〇〇八年刊行。

(31) 文化財登録については長く懸案であったが、今回登録に踏み切ったのは福井憲彦学長の英断によるものである。

(32) このときに作成したパネルは現在同窓会組織桜友会のイベント時に貸し出され、各地で展示されている。

(33) これらの活動についてはホームページ上で公開し、随時更新をおこなっている。また本号より彙報欄「平成一九・二〇年度の活動の記録」の充実もおこなっている。